

デーリー東北 2026年(令和8年)6月3日(水曜日) (9)

中国人でなければよかった。来日したばかりの頃、何度もそう思った。周囲の日本人たちのように自然な日本語を話し、美しい文章を書き、日本社会特有の空気を読める「日本人らしい人」になりたいと強く願っていた。だが、それほど努力しても、ネイティブの日本人にはなれない。その事実をようやく受け入れられた時、不自然になってしまっていた自分自身と、少しずつ和解できるようになった。

来日して10年以上がたち、中国人であることに、むしろ誇りを抱くようになった。日本にいるからこそ、中国の文化や歴史、そして中国人としての自分自身を、少し距離を置きながら見つめ直すことができる。

日本が好きだからこそ、この国へ来た。けれど同時に、中国人としてのアイデンティティもまた、大切にしたいと思う。

「昨日、日中関係は台湾

ディア・チャイナ

—— 戴 周杰



問題などを背景に緊張感が高まり、両親が心配して電話をかけてくる回数も増えた。今年2月に帰省し、コロナ禍以降初めて家族と共に春節を過ごした。久しぶりに外祖母の家を訪ねた時、母はほとんど語ることのなかったわが家の歴史を、静かに話してくれた。

曾祖父は、かつて国民

党に所属していたという。中華民国の黄埔軍官学校で教鞭を執った時期もあったらしい。1949年、国民党と共産党の内戦の中で、故郷の湖

南省・攸県から台湾へ撤退するよう命じられた。しかし、曾祖父は故郷への愛着から、中国大陸に残る道を選んだ。

その後、文化大革命が始まる。国民党出身という理由だけで、曾祖父は長い間苦しい状況に置かれたと、母は語った。

同じ中国人同士なのに、なぜそこまで深く傷つけ合わなければならなかったのだろう。曾祖父が台湾へ渡っていたなら、もっと幸せな人生を送っていたのではないかと、そんなことを考えた。

来日してからの道のりは、決して順風満帆では

なかった。それでも、たくさんの方々を支えられて、ここまで歩いてくることができた。自分で選んだ道だからこそ、後悔はない。

日本の方々から「戴さんと出会って、中国人に対する印象が変わった」と言われるたび、胸の奥には複雑な感情が残る。私一人が「中国人」という大きな存在を代表できるわけではないと痛感する。それでも、自分という小さな存在を通して、誰かの見方や距離感が少しでも変わったのなら、やはりうれしい。

「日本人らしい人」になれなかった私は、来日してからの10年間、自身自身のアイデンティティを探し続けてきた。その末に、日本にいるからこそ、私は中国人なのだ気付くことができた。また会おうね、ディア・チャイナ。

(たい・しゅうき 八戸工業大感性デザイン学部助教、中国湖南省出身、八戸市在住)

著作権保護のため
画像は表示できません

「プリムラ・オブコニカ」
佐々木香 (八戸市)
＝第65回チャールズ会八戸展＝